

新潮文庫

朱を奪うもの

円地文子著



新潮社

あけ　うば
朱を奪うもの

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 127 C

昭和三十八年十一月二十日 発行
昭和四十七年六月十日 十一刷

著　者

円　地　文　子
えん　ち　ふみこ

発　行　者

佐　藤　亮　一

発　行　所

株式會社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

朱を奪うもの

円地文子著

新潮社版

1591

目次

第一章	朱 ^{あけ} を奪うもの……………	七
第二章	わが恋の色……………	四一
第三章	二つの劇場で……………	七四
第四章	女の道化……………	一二四
第五章	続女の道化……………	一三九

解説 奥野健男

朱^{しゆ}
を
奪^う
う
も
の

第一章 朱^{あけ}を奪うもの

宗像滋子は歯科大学の抜歯室の椅子にがっくり頭を倒してぼんやりしていた。口の中には一ぱいガーゼがつまっている。今しがた抜きとられた歯から左側の上唇一帯が注射薬にしびれてゴム鞠のようにふくらんで感じられた。

「さあ、これで全部抜けました、もう歯痛で苦しむ思いは一生ありませんよ」

柔和な笑顔のS教授は滋子の肩を軽く敲いて、しばらく静かにしているように言捨てて去って行った。

S教授の言葉にはうなずいて見せたが、口の中にもう自分の歯が一本もないのだと滋子が実感したのはそれから可成り経ったあとだった。細い注射針を何本も突き刺されて麻痺している歯齦から歯を引抜く間、感じられる痛みは殆どなかったが、抜歯器にしっかり挟まれた根の深い歯が無慈悲な力でめりめりと肉から離れてゆく瞬間には、他の感覚が全部生きているだけに、もしそこが麻痺していなかったらどれほどの苦痛に七顛八倒するであろうと想像するだけで身体中が縮み、気死の状態に陥ちこんでしまった。口の中ががらん洞になった、亀の子の口のようになった

と気づくとあっと声を立てそうになった。長年齲齒や齒槽膿漏に苦しめられて来た齒の最後の始末がついて、ほっとするよりも大切なものを盗まれたような喪失の思いが強いのである。

滋子はそっと身体を起して眼の前の台の上の銀色の盆を見た。そこには、鉤や鑿や釘抜きに似た抜歯器具や注射器と一緒に、今滋子の口から抜き取ったばかりの四五本の齒が行儀よく置並べられていた。大抵先きは朽ちていたがどれも根が茶っぽく汚れて煙草染^じみた象牙のパイプの色であった。中に一本細い牙のように根が弓なりに曲って三センチ近くもある齒があった。滋子はその齒をおそろおそろ指さきにつまみとって眼に近くよせて見た。この齒は左の前齒から三本目にあってもう二三年来抜けそうでぬけず、川水に揺られる杙のように舌のさきで動かすとぐらりぐらり動いていた。もう抜けるだろう、ぬけるだろうと、つい今朝まで舌のさきで癖のように動かしてつづけていたのに、今ぬきとって見るとこの根はこんなに深く肉に食入って、二センチ近くも埋っていたのである。滋子はその齒の肌をそっと触^{さわ}ってみて眼に触れる部分の滑らかな硬さと肉にくい込んでいた茶色い細い部分のざらざら粗い手当りにこの齒の自分の底から生^はえ出、育ち、生き耐えて来た長い年月を思った。ものを噛む力の失われたこの齒を滋子は荷厄介にして早く抜ける抜けるといじり散らして来たが、齒の肉に食い込んだ生命は思いの外に根深いのであった。磨滅した一本の齒に滋子はやるせない悔と愛着を感じた。自分の肉体と離れてしまった齒は、もうどんなに足擦りしても自分のものにはならない。自分の生命の一部の死んだのを正しくわが眼で見ているのである。齒はそのまま自分の骨に見えた。

三度目なのだと思つて荒寥とした。自分の眼で見たわけではなかったが、前に二度滋子は身体をメスで切り裂かれ蝕^{むしば}んだオーガンを抉^{えぐ}り出されていた。一度は右の乳を結核菌に冒されたため、もう一度は女だけの疾む癌であった。手術を受けた二度とも性器の病氣なのが滋子には何かの呪詛のように気味悪く思われた。乳を切った時はそれほどにも思わなかったが、二度目の手術を受けたあとでは、女の性質を失って行くのではないか、そういう性の喪失がやがて生きる力をさえ失わせるのではないかと不安に苛まれることが多かった。その時に滋子を力づけたのは何とも奇矯な聯想であつたが、司馬遷が「史記」を書いたことであつた。司馬遷は政治に志を持っていたがそのために事に坐して宮刑を受けた。「史記」は司馬遷のそうした肉体の変化の後に描かれた非情な人間の歴史である。司馬遷は人間に対して酷薄にならざるを得なかったが、彼の冷酷に書きぬいた人間の歴史は、司馬遷の非情を越えて生々しい血や肉のうごめきを数千年を隔てた現在にも感じさせる力をもっている。司馬遷は失われた性の執着を全部史記の中に注ぎ入れたのだ。

こんな風に女性の機能を失ったことが生^{なま}な悲哀や足擦りにならず、すぐ何千年も前の中国の歴史家への共感に滑べっこく結びついてゆく自分の思索自体の奇妙さを滋子は滑稽に感じた。これも滋子の中にどっかり据わって動かない化物の仕業であつた。化物は滋子の中に底深く隠されていて、土竜^{もぐら}のように陽の眼を見ない。どこから来たのかもはっきり解らないが、滋子の生命の消え去る日までは滋子の肉体の底にもそもそ土をもたげつづけ、滋子の精神に穴を穿^{うが}ちつづけるで

あろう。

滋子の身体に乳が一つしかないことも、子宮ががらん洞になっていることも話さなければ誰れも知りはない。恐らく亀の子のように舌と唇の吸いつき合う今の歯なしの状態が数日後に義歯でごまかされれば、人は一向注意しなくなる……それ以上に着物の下の秘密は誰れにも気づかれはしない。顔に痣一つ、切傷一つあっても他人は眼をそばたてるけれども、隠された部分の片輪は一向気づかれずそのまま何げなく人生が流れてゆくのだ。こんな片輪がどうにも騙せないのは恋愛の起った場合だけであろう。滋子は女性の機能を失った後も幾度か男に恋した、恋をするに心にひどく脆いところが出来て恰度薄皮の出来たばかりの新しい傷に風や寒さが滲み透るような痛み易い気持になるのが若いときからの癖であったが、そのフィードブルな心の状態を味う度に滋子は自分の肉体は毀されていても情緒には性が生きているのを頼もしく思った。しかしそれはそれだけのことで滋子はあの病氣以来自分の身体を爆薬のように怖れていたし、生命への恐怖を凌ぐほど強い情熱の虜になったこともなかった。

もっとも滋子は丈夫でいたところでさえ情熱の不足した女だった。生命全体が焰になって燃え上る瞬間を滋子は曾つて経験したことがない。抒情として男を恋する思いは烈しくもあり、綿々と絶えぬ愛執でもあったが、それは結局あの「かげろうの日記」を書いた王朝貴婦人作家の末裔を自覚させる燃え切らない自我のナルシス風な展開だったのである。抒情を愛情と見あやまって安心していられた間割に幸福だった滋子は、抒情が一種の自慰作用だと自分の心をふき分けるよう

になってから一層孤独になりそれが本来の自分の是非ない姿に食いしめられるようになった。

西洋映画をみていると「あなたを愛す」「お前を愛す」愛す、愛す、愛すという言葉がふんだんに出て来て男と女が唇を合せたり、力をこめて抱きあったりする。そんな時女は大抵嬉々としているが、男の顔には暗鬱な苦渋が滲んでいる。男の性に負わされた荷物が翳らす陰影なのだ。滋子はスクリーンの上でそういう男の顔を見る度に、性の加害者のようにばかり見られる男が可哀そうで堪らなくなる。そうして男の与えられた荷を理解することの出来なかった自分の過去に悔を感じるのだ。

ふりかえって見れば、滋子はもの心ついたところから生なまの人間を見失っていた。生きた人間の生活にあるものよりも、遙かに貪婪なめざましい世界を無自覚の中に外から与えられてしまったのだ。それが幸福とか不幸とかの定義にははまらないまでも、一見平凡に見える滋子の肉体と精神をアブノーマルに変形させたことは否めない。つまり彼女の中に土竜のように住んでいる化物の正体である。女性の性を半ば以上肉体から奪われた滋子は、今もう一度少女時代から口の中に生えかたまつて、一緒に生きてきた歯をぬき去ってしまった。その三つの死を思うと滋子は自分に与えられた生命の歴史の不思議さについて、何とも語りたくてたまらなくなる。滋子は口の中にガーゼの猿轡をされたまま遙かな記憶へ自分を誘って行った。

滋子の記憶の最初のページに浮んで来るのは古風な武者窓のついた黒い長屋門とその門の前の

広いだらだら坂の上に赤く塗った丸いポストがぼつんと立っている風景である。坂はいつも人氣なく白っぽく乾いている。坂の上は広い通りを越えて靖国神社の境内になっていたから、恐らく小さい滋子は女中の背に負われたり祖母に手をひかれたりして始終その坂を上り降りしていたに違いない。ひよっこや鶯の形の彩色した飴を売る飴屋やヴァイオリンを抱えた艶歌師もその坂の印象と一緒によみがえって来るが、その勾配のゆるい白っぽい坂道は不思議に滋子の思い出の中の一番静かな心の憩まる場所なのである。六つまで育ったその山ノ手の家の庭の様子や家の造りは殆ど覚えていないのに、庭の隅にあった四角い自然石の空井戸と、その上に蔽いかぶさっていた石榴の樹の小さい照りのよい葉群の間の新しい傷口のように笑みわれた実の淡紅に光る粒……又井戸の深い底に散りたまつて、風に鳴る枯葉の乾いた音、……そういう断片的な印象は長い年月の堆い塵の底に今も鮮明に残っている。

靖国神社のことを祖母や父は招魂社と呼んでいた。日露戦争からまだ十年とたたないころのことで初夏と秋の祭礼の時にになると、青銅の大鳥居のあたりから境内の両側は見世物小屋で一ぱいになった。内へ入ることは殆どしなかったが、祭の時といえは滋子は祖母に連れられてそのひろい境内を埋めている見世物小屋の前をぶらぶら歩いた。どぎつい泥絵具でけばけばしく塗りたてた看板絵には、白い細布のようにくねくねうねった首のさきに島田髻の娘の顔が笑って、胴は三味線を抱いているろくろ首や、身体に金色の鱗の生えた人魚の髪のふり乱れたのや、いくつもの蛇を身体に巻きつけている蛇使いの女の絵などが描いてあって、その下で異様につぶれた声の

客引きが拍子木を敲き敲き因果物の口上を述べたてていた。いくつもの絵がかたなかたんと變つておしまいに小さい画面一帯が口の耳まで裂けた猫の顔になる化猫ののぞき機械からくりもあった。

小さい滋子のごま塩の髪を盆の窪の上で綺麗に切揃えて髪止めではさんでいる、しゃんとした身体つきの祖母を見上げてはそれらの異様な看板絵の内容についてきいた。

「皆嘘なんだよ、ろくろっ首というのはね、うしろに黒い幕があつて下に一人三味線を弾いていると首がにょろにょろのびて上の方で頭の方が笑つて見えるんだけど、よく見るとその伸びる首のところが造りもので、上の顔と下の胴とは別々の人間なんだよ。首が上の方へゆくに從つて黒幕の中から顔だけ出して梯子はしこを上って行くんだろ……人魚だつて同じようなものさ。見ている方も騙されてるのがわかつて面白がつてるんだから……妙なものだよ」

祖母は江戸ッ子らしい男っぽい口のきき方で滋子の手をひいて強い足さばきで歩きながら言つた。しかし滋子の子供の頭は祖母の解説するほど、人魚やろくろ首の非現実性を認めてはいなかった。何故と言え、母親のない滋子は毎朝眼がさめると隣の祖母の床の中へもぐり込んで祖母からさまざまな話をきくのを楽しんでたからだ。祖母の話は江戸時代の稗史小説や芝居の筋が多かったが、それと同じくらいに滋子を昂奮させたり恐怖させたりしたのは、祖母の若いころ育つた江戸の町に市民の間でまざまざと語られていた怪談であつた。本所や番町の七不思議の話、実際に誰れかが見たという狸や狐の化けた話、それらを話し上手の祖母は役者のように手ぶり身ぶりを入れて面白おかしく話してくれた。祖母は昔話をきくことに熱心な滋子を可愛がつて、民

話の原則に違わず幼児に前代の物語を伝承しているのであったが、それらの話自身ろくろ首や人魚の見世物と縁のないものでないことを老人はまるで気づいていないのであった。

祖母の話の一つに足洗い屋敷というのがあった。本所の七不思議の一つだった。その武家屋敷では夜中に天井から大きな毛むくじやらの足がぬっと下って来るといのである。その屋敷の中で一番美しい腰元がぬるま湯を沸かしておいて、その足をそっと洗ってやる……足はぬらぬらし、ていてなかなか綺麗にならないのだが、幾度も洗ってよく拭いてやらないとおとなしく天井へ帰って行かず暴れまわるので、その腰元は怖さを堪えて、綺麗になるまで叮嚀に足を洗ってやるというのだ。男の毛むくじやらの足のぬらぬらししているのをそっと洗ってやる美しい腰元はさぞ怖くて身も世もないであろうと想像するだけで、滋子はすくんで眼を睜り、しかしそういう怖い話をきく度に足を洗ってやる腰元の頸の白さや慄える手のおびえた美しさは普通の美しさ以上に滋子を強く捕えるのであった。

滋子の父の藤木志朗はS大の英文学科の教授であったが英文学者としてよりも新しい演劇の指導者としての方が遥かに著名でもあり優れてもいた。藤木は四十余年の短い生涯を新劇運動に挺身して終ったが、新劇ばかりでなく、古い歌舞伎の復活や改作にも創意に満ちた業績を遺している。藤木のそういう古典劇に対する愛情は主に母のたねから承けたもので、江戸の侍の家に生れて漢学と踊りと三味線を同時に稽古したというたねは長い未亡人生活の間に二人の男の子を育て

上げ、半ば中性化して生きて来たが、彼女を息子達の嫁に対して姑根性にさせなかったのは、それらの素養が常にたねの心を現実以外の世界へ誘っていたためだったかも知れない。最初の妻に死なれてあと、ずっと独身を通してゐる滋子の父のためにたねは長男の裁判官の家を離れて同居していた。

七十になっても記憶の少しも衰えないたねは、生れるとすぐ母に別れて殆ど自分の手で育てた滋子にも普通の祖母が孫に見せるような舐めるような愛し方は全く見せなかった。滋子も祖母の白い艶のよい胸の美しい小さい乳首を口に入れたり、たのしくまさぐったりした記憶のある癖に祖母を肉感を持って母代ははしろに感じることは一度もなかった。

それなのに、父が外出勝ちであつても一向母のいない寂しさをやるせなさを幼い滋子が感じなかったのは、祖母の傍にいればいつでも面白い物語が祖母の中から吐き出されて来る——それをきいて自分の中へ呑みこむことが限りなくなったのしかつたからなのである。

藤木が出かけてしまうと広い家の中はひっそりする。主婦のいない家では御隠居さまと女中たちと呼ばれるたねがいつも茶の間の火鉢の前にきちんと坐っている。行儀のよいたねは殆ど膝を崩したことがない。たねの坐っている前には二尺ぐらいの厚い裁ち板が置いてあつて、その上にはさまざまな着物の布がのっている。たね自身針を動かしていることもあり、若い女中に裁ち方やつもり方を教えてゐる時もあった。年とっても首筋のしゃんと立った眼の切れの美しいたねの様子には老人らしい渋滞がなく、女中や書生からも頼もしい主婦に信じられていた。玄関に客が